

『ガリヴァー旅行記』における日本

島 高 行

はじめに

Felicity Nussbaum と Laura Brown が編集した *The New Eighteenth Century: Theory, Politics, English literature* (1987) は、ニュー・ヒストリシズムやジェンダー研究などの理論がいよいよ 18 世紀イギリス文学研究にも本格的に導入されてきたことを示す点で、画期的な論集であった。その後、21 世紀に入ってからヌスバウムの編集による *The Global Eighteenth Century* (2003) が刊行されたが、ここで扱われる題材は絵画、地図、観光マニュアル、旅行記、庭園などと、以前の論集よりもはるかに多様化していた。また、学問領域においてもいわゆる文学研究だけでなく、歴史、美術史、地理学など多方面からのアプローチがなされていることが特徴となっている。特にそのタイトルにあるグローバルという言葉が示すように、そこで論じられるのはイギリスあるいはヨーロッパだけでなく、アフリカ、南北アメリカ、アジア、オセアニアにまで及んでいる。このように現代の 18 世紀イギリス文学研究においては、その対象も方法も大きな変貌を遂げつつあるといえることができる。

こうした動向を踏まえつつ、本稿では Jonathan Swift の *Gulliver's Travels* (1726) の第 3 部に登場する日本を取り上げる。その際、この作品で登場する日本が必ずオランダとともに描かれていることに注目する。そして『ガリヴァー旅行記』が出版された 18 世紀前半におけるイギリス、オランダ、日本の関係が、この作品においてどのように表現されているかについて考察することにしたい。

1

『ガリヴァー旅行記』第 3 部は、空中に浮かぶ島や不死の人など奇想天外な話に満ちている。その中で日本人が登場するのは冒頭、ガリヴァーが乗った船が日本人を船長とする海賊に襲われる場面と、架空の島々から母国イギリスに戻る途中にガリヴァーが立ち寄った日本での短いエピソードが

描かれる結末部のみである。日本は『ガリヴァー旅行記』に登場するほぼ唯一実在する国であり、第3部の冒頭と結末を飾っているにもかかわらず、その意義はあまり注目を集めてこなかったのが実情である。

しかし、先に紹介した研究動向もあり、18世紀ヨーロッパにおけるアジア表象が問題にされるなかで、この部分に着目したのが Robert Markley, *The Far East and the English Imagination, 1600-1730* であり、特にその第7章“Gulliver, the Japanese, and the fantasy of European abjection”である。同書では、初期近代の John Milton から 18 世紀前半にいたるイギリス文学における「極東」のイメージの変遷を扱う。ここでヨーロッパの圧倒的な経済力と軍事力によってアジアは支配されたという旧来の歴史観と、それに基づく一面的なポストコロニアル批評が厳しく批判される。そしてマークリーは近年の経済史の成果、特に Andre Gunder Frank の *ReOrient: Global Economy in the Asian Age* (Berkeley: University of California Press, 1998) などを参照しつつ、少なくとも 1730 年代まで世界経済において圧倒的な影響力を誇っていたのはヨーロッパではなく、中国、インド、日本であったと論じる。さらに 17 世紀ヨーロッパは資源の全面的枯渇という“general crisis” (Markley, 5) に見舞われており、遠隔地貿易に活路を見出すしかないヨーロッパにとって、豊かなアジアは“a fantasy space for mercantile capitalism” (Markley 4) であったとする。

ヨーロッパが紡いだ、無尽蔵の資源が眠る「極東」という幻想が、搾取の対象へと変化していく過程を、マークリーは“eco-cultural materialism”と名付けられた方法によって文学作品を分析し、明らかにしていく。こうした壮大な構図の中でマークリーは『ガリヴァー旅行記』も取り上げており、そこでの日本の表象が問題とされ、刺激的な論が展開されている。しかし初期近代から 18 世紀前半までという広いスパンの中での議論のため、単独の作品論として読んだときには物足りなさを感じることも否めない。そこでマークリーの論を出発点として、『ガリヴァー旅行記』第3部における日本の意義、あるいは作品全体の構成の中での日本の意義をこれから考えていくことにしたい。

II

『ガリヴァー旅行記』は当時流行していた旅行記のパロディであり、主人公で語り手でもあるガリヴァーは小人の国や巨人の国など現実にはあり得ない架空の世界を訪れて、奇想天外な物語をもっともらしく語っている。今日では架空旅行記というジャンルに分類されるこの作品に登場する国の中で、ほぼ唯一実在するのが日本である。ただし日本でのガリヴァーの活躍はほとんどなく、オランダ人商人と偽って入国したガリヴァーが江戸で「皇帝」(the Emperor) に拝謁した後、長崎からアムステルダムへ行くオランダ船で帰国の途に就くまでの様子が淡々と描かれているだけである。長崎で「踏み絵」を拒否したことから、日本の役人に不審がられるというエピソードが目を引きくらしいである。

しかし日本から帰国するガリヴァーが乗った船の名が、アンボイナ号 (the Amboyna) と名付けられている点に注目したい。アンボイナつまりアンボンとは東南アジアの香料諸島の一つであり、17 世紀におけるイギリスとオランダとの関係において、相互不信を決定づけた事件が起きた場所だ

からである。同じプロテスタント国家でありながら、アジアとの貿易では熾烈な競争相手でもあるという両国の対立が決定的になった場所、それがアンボンであった。次に17世紀からのイギリスとオランダの関係について簡単にまとめておこう。

エリザベス朝のイギリスにとってオランダは同じプロテスタント国家であったため、カトリック国スペインを共通の敵とする点で利害が一致していた。しかし17世紀のイギリスでは海外との交易が飛躍的に増大し、新大陸での植民地も本格化し始めた。農業国から貿易を中心とする商業国へとイギリスが変貌していく大きな社会的変化の兆しが見え始めた時期といえる。海外、特にアジアに進出しようとするイギリスにとって、一足早く金融システムを整え、貿易立国としての自己像を確立していたオランダは先行するライバルであった。特に膨大な富を生み出す香辛料をめぐって、香料諸島との貿易を独占するオランダは、イギリスが世界貿易の主導権を握るためには絶対に排除しなければならない存在であった。

こうした両国間の関係の悪化は三度にわたる英蘭戦争を引き起こすことになり、オランダ衰退の原因の一つとなった。戦争にまで至った原因として、パンフレットなどを使ったプロパガンダによって、民衆レベルでのお互いのイメージが修復不可能なほどに悪くなり、交渉によって解決することが難しかったと考えられている¹。

そしてイギリスにおいて反オランダ・プロパガンダのためにしばしば取り上げられた事件が、1623年に起きたアンボン虐殺事件である。ほかならぬガリヴァーが日本から乗った船につけられた名であるアンボンとは、どのような事件があった場所なのだろうか。

17世紀初頭、ナツメグなどの香辛料をめぐって、イギリスとオランダはいわゆる「東インド」の海域で断続的に衝突を繰り返していた。しかしスペインとの戦争を抱えるオランダは、イギリスと本格的な戦争をする余裕はなく、協定を結んでこの地域で共存を図る道を選んだ。その結果、1619年、オランダとイギリスのそれぞれの東インド会社が協定を結び、イギリスが香料貿易の権利の一部を獲得する代わりに、オランダ側が築いた現地の要塞と守備部隊の維持費の一部をイギリスが負担することとなった。ところがオランダの総督はこの協定を無視し、イギリス人を排除しようとしたため、かえって関係が悪化することとなってしまった。このような情勢下で起きたのがアンボン虐殺事件であった。

アンボン島は1605年にオランダがポルトガルから奪い、オランダ東インド会社が実質的に支配し要塞を築いていた。協定締結後、イギリスも商館を要塞内に設けていたが、1623年2月9日、守備隊に所属する日本人傭兵がイギリスのスパイの嫌疑をかけられる。さらにイギリスの商館員が要塞を奪取しようとする計画を企てていたとする自白が引き出されたため、オランダ側はイギリス東インド会社の10人の館員と9人の日本人傭兵、そしてポルトガル人1人を拷問にかけたうえで処刑した。事件の真相ははっきりしないが、この事件によってイギリスが香料諸島での交易をあきらめ、インドとの貿易に専念するようになる契機とされている。

こうして圧倒的な海軍力を誇るイギリス海軍をもってしても、東南アジアの海域ではオランダの独占を打破することができず、イギリスは屈辱的な撤退を余儀なくされた。アンボンの名は、軍事力、経済力においてオランダに敗北したという“traumatic memory” (Markley 146) として、オランダへの不信、憎悪とともにイギリス国民に深く根付くこととなったのである。

この国民的トラウマとなった事件を、演劇によって反オランダ・プロパガンダに利用したのが、John Dryden の *Amboyna* (1672) である。第三次英蘭戦争直前に初演されたこの劇が上演された背景には、プロテスタント国であるイギリスがなぜカトリック国であるフランスを支援し、同じプロテスタント国であるオランダと闘わなければならないのか、という当時の支配的な世論と厭戦気分があった。フランスよりのスチュワート王家の意向に沿ってイギリスを英蘭戦争へと向かわせる意図が、この劇にはあったと思われる。

劇の舞台はもちろんアンボン島で、実際の事件をなぞるように、高潔なイギリス人商館員が冷酷なオランダ人によって拷問にかけられ、処刑される悲劇である。物語は次のように展開する。アンボンのイギリス人商館員 Towerson は現地人の娘 Ysabinda と結婚するが、オランダ人総督 Harman の息子 Harman Junior は、タワソンによって命を救われたことがあったにもかかわらず、彼女によこしな思いを抱き、ついには強姦までしてしまう。その報復としてタワソンはハーマン・ジュニアを殺害するが、偽証によってその真相は隠蔽され、さらにイギリス人によるオランダ人に対する陰謀が暴かれたため、要塞のイギリス人すべてが逮捕される結果となる。殺人の罪により処刑されるタワソンがオランダ人に呪いの言葉をかける場面で終わるこの劇で強調されるのは、自分の欲望を満足させるためなら、命の恩人であるタワソンすら裏切るオランダ人ハーマン・ジュニアの非道さであり、彼に代表されるオランダ人の悪辣さである。

タワソンとハーマン・ジュニアがイサビンダという一人の現地人女性をめぐる争うこの物語は、明らかに香料諸島の資源をめぐるイギリスとオランダの戦いを表象している。この劇は当時のイギリスの観客にイギリスとオランダの貿易観の違いを対照的に提示する。イサビンダに向けられたオランダ人ハーマン・ジュニアの暴力は “the illegal, tyrannical appropriation of the East Indies by the Dutch” (Markley 161) をあらわし、一方、イサビンダがタワソンに寄せる愛は “a ‘mutual’ desire for harmonious, and hierarchical, relations between British merchants and dutiful East Indies” (Markley 161) をあらわしている。つまりこの劇が訴えかけているのは、利己的な欲望を満たすためには暴力に訴えることも辞さないオランダ人と、礼節を重んじ相互的な利益を求めるイギリス人という正反対の通商観である。

このイギリスとオランダの対照が、『ガリヴァー旅行記』ではどのように描かれるのか次に見てみたい。ただしこの劇の問題はオランダ人の非道さが批判的に描かれ、イギリス人の高潔さが英雄的に描かれるのだが、問題は後者が破滅するという結末にある。つまり、この劇ではオランダ人の利己主義による暴力的な貿易観が批判されながら、イギリス人が「倫理的に擁護しうる貿易観を語ってはいても、新たな海洋帝国のヴィジョンを提示できていない」(末廣 83) ののである。先行する海洋国家オランダを乗り越えて、どのような国家像をイギリスは目指すべきなのか、この未解決の課題に対し、『ガリヴァー旅行記』はどのように取り組んでいるのかという問題についてはあらためて論じることにする。

III

当時のイギリス人にとって強烈なインパクトを持っていたアンボンの名を、スウィフトはなぜガリヴァーが乗る船の名に使ったのだろうか。まず名誉革命後のイギリスの状況を確認しておこう。イギリス議会はオランダの指導者ウィレム（ウィリアム）を招へいし、国王とする体制をしいた。しかしオランダ出身の国王は不人気であり、オランダとの強い関係を持つことでイギリスがヨーロッパ大陸の戦争に巻き込まれるのではないかという懸念がしばしば表明されていた。その不安が現実化したのが、1701年に始まったスペイン継承戦争である。「オランダの戦争」とも呼ばれたこの戦争が長期化したこともあり、名誉革命後の政治体制に反対する政党トーリーにとっては絶好の批判的となった。そしてこの戦争をめぐって、新たな反オランダ・プロバガンダが展開されることとなった。そこで描かれるオランダは、かつてイギリスから支援を受けて独立を達成したのに、今はイギリスを敵国フランスとたたかわせ、漁夫の利を得ている悪辣な存在であった。Simon Schamaは、次のように当時の状況をまとめている。

During the long War of Spanish Succession, Tory pamphleteers harped on the Dutch perpetuation of hostilities in their own narrowly selfish interest and accused their defenders of being lackeys of the Bank of Amsterdam happy to fleece the landed gentry to pay for a “Dutch” war. (Schama 260)

18世紀初頭の反オランダ・プロバガンダにおいても、オランダは金銭の神 Mammon に仕え、無知なイギリスを利用して金銭欲を満たす信用ならない国なのである。そしてその犠牲になっているのが、イギリスのジェントリー層だというのだ。この大土地所有者であるジェントリー層はトーリー支持の中心となった人々であり、商工業者が主に支持し、スペイン継承戦争を主導したホイッグと対立していた。

スウィフトもトーリー側に加わってパンフレット活動を精力的に行い、ホイッグからトーリーへの政権交代実現に功績があった。しかし彼が期待したような地位は与えられず、さらにトーリーの内部対立もあって、トーリー主導の政府はすぐに政権を奪われてしまう。こうしてスウィフトの立身出世の夢はついていたのであった。

以上のような状況下で執筆されたのが『ガリヴァー旅行記』である。次に『ガリヴァー旅行記』第3巻冒頭で、ガリヴァーの乗った船が海賊船に襲われる場面を見てみよう。日本人の指揮する海賊の中にオランダ人が混じっており、ガリヴァーは彼と以下のような対話をしている。

I observed among them a Dutchman, who seemed to be of some Authority, although he were not Commander of either Ship. He knew us by our countenances to be English men, and jabbering to us in his own language, swore we should be tyed Back to Back, and thrown in to the Sea. I spoke Dutch torelably well; I told him who we were, and begged him in Consideration of our being Christians and Protestants, of neighbouring Countries, in

strict Alliance, that he would move the Captains to take some Pity on us. This inflamed his Rage, he repeated his Threatenings, and turning to his Companions, spoke with great Vehemence, in the Japanese Language, as I suppose; often using the Word Christianos. (150)

ここでガリヴァーが訴えている同盟とは1701年、フランスに対抗して結ばれた同盟のことである。同じキリスト教徒であり、しかもプロテスタントであり、強大なカトリック国フランスに対抗する同盟国という図式でガリヴァーは、オランダ人海賊に訴えかけているのである。

このレトリックはドライデンの『アンボン』においても見ることができる。海賊に襲われたオランダ人ハーマン・ジュニアの命を救ったタワソンは、感謝するハーマン・ジュニアに対して次のように語りかける。

In your deliverance I did no more,
Than what I had myself from you expected:
The common ties of our religion,
And those, yet more particular, of peace
And strict commerce betwixt us and your nation,
Exacted all I did, or could have done.

(I i20)

ここで強調されているのはキリスト教というイギリスとオランダの共通の絆であり、さらに通商が前提とする両国間の信義である。

騎士道精神を見せ、高潔なタワソンが、忘恩の徒ハーマン・ジュニアにやがて裏切られることになるのと同様に、『ガリヴァー旅行記』においてもガリヴァーの言葉はかえってオランダ人海賊を怒らせてしまう。その結果、オランダ人の強い主張によってガリヴァーは小さなカヌーに乘せられて、海に放り出されてしまう。ガリヴァーたちの命までは奪わないとする約束を守り、寛容な態度を見せる日本人海賊に対し、オランダ人の冷酷さが対照的に描かれている場面である。つまりここでもオランダ人は異教徒よりも残酷で、アジアにおけるライヴァルであるイギリス人にはげしい敵愾心を燃やす存在として描かれているのである。

さらにこのオランダ人が日本人海賊の指揮下にあることに注意しよう。オランダ人が日本人と組んで、イギリス船を襲撃し、しかも日本人の命令に従っている。このことは何を意味するのだろうか。

第3巻の最後に日本を訪れたガリヴァーは、皇帝に踏み絵を免除してもらうように嘆願する。すると皇帝はそのような申し出をするのはガリヴァーが初めてであり、おまえは本当にオランダ人なのか、キリスト教徒ではないのかと不審がるという場面がある。第3巻の冒頭と最後に登場するオランダ人は、利益のために同じキリスト教徒を犠牲にし、異教徒である日本人の命令に唯々諾々と従って、信仰すらも捨てて顧みない点で共通しているのだ²。

実際、オランダは日本との貿易を確保するために、当時の徳川幕府の要求を次々と受け入れている。武器や日本人傭兵の輸出禁止が求められればそれに従っているし、1601年に商館を平戸から長崎に

移転させられ、さらに出島のみに居住を許されるという不自由さも甘受している。ヨーロッパ屈指の海軍力を誇る国家オランダが、日本では出島という“a mercantile ghetto” (Markley 246) に閉じ込められる屈辱にあっていたのである。さらに1637年の天草・島原の乱においては、キリスト教徒の立てこもる原城に向けて、幕府の依頼を受けたオランダの船が海上から大砲を撃つということまでしている。貿易による利益を独占するためにオランダは異教徒である日本に協力し、同じキリスト教徒を攻撃した。このようにオランダは日本に対し「アジアの他地域でしばしば見せた高圧的で不遜な態度とは大違いの、信じられないような低姿勢」(羽田 141 - 2) を示していたのだ。

日本人によってオランダ人が行動の自由を制限され、同じキリスト教徒への攻撃に手を貸すことまでさせられるというこの事態は、ヨーロッパ中心史観への深刻な打撃であった。そしてイエズス会の宣教にもかかわらずキリスト教化することのなかった日本が、戦国時代の内戦を乗り越え精緻な政治体制を築きあげていることは、キリスト教徒以外は野蛮とみなす考え方からすれば受け入れにくい事実であった。

さらに海外貿易に活路を見出そうとしていたイギリスにとって特に日本の存在が問題であったのは、当時の日本が鎖国政策を取り、徹底的に国家によって管理、限定された貿易しか行っていない点にある。当時のヨーロッパにとって、日本は他国との通商を最低限にとどめることで社会の安定を保ち、しかも一定の豊かさを享受する特異な島国であった。通商こそが文明国の証であり、貿易によって国家は栄えるというイデオロギーにとって、鎖国政策をとりながら豊かな日本は非常にやっかいな問題であったのだ。この点について、17世紀の地理学者Peter Heylynの著作*Microcosmos* (1625)の日本に関する記述を参照しながらマークリーは次のようにまとめている。

Like other writers for the next two centuries, he (Heylyn) describes a country that is characterized by its civilized morality, good government, and rigorous adherence to the rule of law, and yet that cannot be located unproblematically on a hierarchical scale of civilized---that is, commercial---nations because it rejects the very grounds of that civility: a desire for and commitment to trade. (Markley 248)

つまり貿易を基本的に拒絶しながら文明国でありうるという難問を、日本はヨーロッパにつきつけていたのである。貿易によって国家は繁栄するというイデオロギーと日本の存在そのものが提示したその反証について、『ガリヴァー旅行記』ではどのように表現されているのか次に見ていくことにしたい。

IV

まず確認しておきたいのは、『ガリヴァー旅行記』が刊行された1726年が、「南海泡沫事件」の6年後であったということだ。これは海外への投資を目的に設立された国策会社が投資熱をあおり、株価が一気に高騰した後、会社の実態のなさが暴露されたために急落し多くの投資家に損害を与え、

社会全体に影響が及んだというイギリス最初のバブル崩壊とされる事件であった。

スウィフト自身は、イギリス銀行設立などの金融システムの整備や株式市場の発展を批判的に見ている。南海泡沫事件がもたらした混乱も、実態のない経済がもたらすマネー・ゲームに熱狂した人々が迎える当然の結末と冷やかに見ている。こうした観点で『ガリヴァー旅行記』を読んでもみると、同じガリヴァーという一人の人物が、小人の国では巨人となり、巨人の国では小人となるという第1巻、第2巻の設定も、当時の価値基準の不安定さを表すものとして見えてくる。大変な価値を持っていた株券が一夜にして紙くずに代わる、そのような苦い体験を南海泡沫事件において味わったイギリスの投資家にとって、このガリヴァーの巨人から小人への変化は他人事ではなかったであろう。

スウィフトにとって特に問題だったのは、農業国から貿易を中心とした商業・金融を中心の産業とするイギリスのいわゆる近代化であり、それがもたらす社会構造の構造的変化であった。この点について、スウィフトは *Examiner* において次のような警告を発している。

Several persons who had small or encumbered estate, sold them, and turned their money into those funds to great advantage; merchants, as well as other monied men, finding trade was dangerous and growing more expensive, taxes were increased, and funds multiplied every year, till they have arrived at the monstrous height we now behold them. And that which was first a corruption, is at last grown necessary. By this means, the wealth of the nation, that used to be reckoned by the value of land, is now computed by the rise and fall of stocks. (6)

伝統的に価値の基準であった土地から、投機の対象として不安定極まりない証券へと国家の富を回る基準も変わりつつある現状を、ここでスウィフトは批判しているわけだ。そして不動のはずの土地すらも投機の対象となり、価値が上下するイギリスの現状は、『ガリヴァー旅行記』第3巻に登場するラピュタを思い起こさせる。

海賊によって船を追われたガリヴァーが漂着した島の上空に浮かんでいたのがラピュタであった。この空中の島は磁石の働きで浮かんでおり、磁石を操作することで下の島との距離を自由に操ることができる。浮かぶはずのない土地が空中に浮かび、また上がったたり、下がったりするというラピュタの特徴は、まさに「土地からマネーへ」と価値基準が変わり、バブルにほんろうされた18世紀前半のイギリス社会の不安定さを象徴するものである。さらに数学にすぐれ、高度なテクノロジーを誇りながら、実際面では全く無能というラピュタの住人の特徴からは、いわゆる経済の発展なるものが数字上のことにとどまり、人々の生活向上とは何の関係もないという、貧しい母国アイルランドからイギリスを見ていたスウィフトの批判的な視線を感じずにはいられない。

ともあれ海外との貿易に活路を見出そうとし、またその国家の方針に沿った金融政策によってバブルが生まれ、崩壊するという痛手を被ったイギリスの現状に、スウィフトは一貫して批判的であった。そしてその批判が、『ガリヴァー旅行記』の諷刺という形で表現されたのである。そしてその価値観が、自由貿易を推進するオランダ人と鎖国政策をとる日本人の対比として表現されていたのである。したがって、第3巻の冒頭と最後に登場する日本人とオランダ人は単なるつなぎのエピソード

ドではなく、第1部から第3部に至る作品全体のテーマと通じるものであったのだ。

V

最後にドライデンの『アンボン』が残した問題、海洋国家としてのイギリスはどのようにあるべきかという問題に戻りたい。『ガリヴァー旅行記』においてもオランダ人は貪欲で冷酷な利己主義者として描かれている。しかし日本でのガリヴァーがオランダ商人に変装していたように、イギリスがアジアとの貿易に活路を見出すならば、一定の軍事力、経済力を持った貿易相手国に迎合しつつ、ヨーロッパの競争相手国は徹底的に排除するというオランダの手法をある程度、まねざるを得ない。この矛盾は『ガリヴァー旅行記』においても解決されていない。

さらに貿易によらずして繁栄している国、日本の存在がある。『ガリヴァー旅行記』の日本人は海賊であっても、信義を守り、寛容でもあるように描かれている。貿易がもたらす社会の変化を、徹底的に通商を管理することで防ぎつつ、貴重な情報や物品だけを受け入れることに日本の鎖国政策は成功していた。このように貿易の利益のみを得て、社会の安定を確保する政策は、スウィフトの保守主義にとっては理想かもしれない。さらに、すさまじい内戦状態を経て社会の安定を回復した日本の歴史は、ピューリタン革命、名誉革命と続いた変動ののち、ようやく安定し始めた18世紀前半のイギリス社会にとっても模範となるものであったろう。しかし日本人は異教徒であり、キリスト教を禁じ弾圧までしている。その社会はヨーロッパとはまったく異なる歴史的背景を持って成立しているのである。そのため日本は、海洋国家イギリスが進むべき方向ではありえないことは明らかである。

ここでオランダ人を嫌悪しつつオランダ人を自称し、安定した繁栄を誇る管理国家日本に滞在するガリヴァーのあり方について考えてみよう。ヨーロッパの人間が日本に滞在するためにはオランダ人になるほかはないが、そのオランダ人は嫌悪すべき存在である。そしてガリヴァーが滞在している国は、ヨーロッパが前提とする文明観、価値観を覆すような場所である。このような状況に日本でのガリヴァーは置かれているのだ。

このガリヴァーの姿を、第4巻フィヌム国におけるガリヴァーと重ね合わせてみるとどうだろうか。フィヌム国では理性をもった馬が支配しており、すべてを理性によって判断し、社会を運営している。こうしたフィヌムたちをガリヴァーは崇拜する一方、人間によく似た醜い獣ヤフーの強欲さにガリヴァーは嫌悪感を覚える。しかし結局のところ、自分もまたヤフーの一員でしかないことをガリヴァーは認めざるを得なくなる。これが第4巻のあらましであるが、理想的ではあっても人間ではないフィヌムと、人間に近い存在ではあっても同一化することは拒否するほかないヤフーとの間に、第4巻のガリヴァーは引き裂かれるのだ。第3巻の日本人をフィヌムに、オランダ人をヤフーに読み替えてみたらどうだろうか。第4巻では人間の在り方そのものが理想と現実の矛盾として問われるのだが、第3巻でスウィフトは同じ構造の問題を名誉革命後のイギリスが取るべき道として問っていたのではないだろうか。理想的ではあるが実現不可能な日本、可能ではあるけれども拒絶すべきモデルとしてのオランダ、両者の間で身動きが取れない18世紀前半のイギリス。このような

状況を『ガリヴァー旅行記』第3巻は提示しているのである。そして次の第4巻においてガリヴァーが直面することになる「理性的な動物」という人間存在が抱える矛盾の問題へとつながっていくのである。

まとめ

『ガリヴァー旅行記』に登場する日本が、常にオランダと組み合わせられて表現されていることの問題点から、日本とオランダが対照性を成していること、そして18世紀初頭、農業国から通商国家へと変貌を遂げつつあったイギリスのあるべき姿を、これら両国がいわば陽画と陰画として示していたのであった。その際、日本は実現不可能な理想郷であり、文字通りのユートピア（どこにもない場所）であった。その意味では『ガリヴァー旅行記』に描かれた日本は、小人の国や巨人の国と同様、架空の国であり、18世紀ヨーロッパにとっての日本のイメージを集めて、オランダのイメージと対立するものとして構成されたものにすぎない。ここで『ガリヴァー旅行記』が実際の旅行記の体裁を利用した架空の物語であったことを思い出そう。実在の国であると同時に不在のユートピアでもある日本は、事実とフィクションとの境界を意図的に混在させた『ガリヴァー旅行記』という作品そのものの性格と一致していたのである。

注

1. 反オランダ・プロバガンダについては、Simon Schama、特に25 - 67頁を参照。
2. イギリスは平戸に商館を開きながらも10年ほどしか維持できずに日本から撤退するほかなかった。このようなイギリスの、日本との貿易を独占するオランダへの嫉妬もこの記述の背景にあるだろう。

引用文献

Dryden, John. *Dryden: The Dramatic Works*, New York: Gordian Press, 1968.

Frank, Andre Gunder. *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*. Berkley: University of California Press, 1998.

Markley, Robert. *The Far East and the English Imagination, 1600-1730*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.

Nussbaum, Felicity and Laura Brown(ed.). *The New Eighteenth Century: Theory, Politics, English literature*. New York: Methuen, 1987.

Nussbaum, Felicity(ed.). *The Global Eighteenth Century*. Baltimore: Johns Hopkins University

Press, 2003.

Schama, Simon. *The Embarrassment of Riches: An Interpretation of Dutch Culture in the Golden Age*. New York: Vintage Books, 1997.

Swift, Jonathan. *Examiner* in *The Prose Writings of Jonathan Swift vol.3*, edited by Herbert Davis. Oxford: 1975.

—————, *Gulliver's Travels*. Oxford: Oxford University Press, 1989.

末廣幹「ブリタニアの胎動—反オランダ意識と海洋帝国ブリテンのイメージ」小野功生他編『＜帝国＞化するイギリス—17世紀の商業社会と文化の諸相』（彩流社、2006年）。

羽田正『東インド会社とアジアの海』（講談社、2007年）。